笹川お菊は時間を持て余すとゴミ拾いに出るような人間だ。

七月二十八日の夕方にお菊は起床した。今朝方までゲームに没頭していたせいである。空腹ではあったが、もう二時間後には夕食にありつけると考えると何かを食べようという気にはならなかった。笹川家では十九時前後が夕飯の時間だという暗黙の了解があった。むかしからそうなので、その時間が近づくと誰に何を言われるまでもなく食卓に姿を現すのだった。

二度寝する気も起きなかった。さらに寝てしまうと夕飯にありつけない可能性があったからだ。キッチンの方から漂うみそ汁の香りが食欲を刺激し、食欲を中途半端に充たしたくなかったというのもあった。

「暇だ……」

つぶやいた彼女はごみ袋とトングを持って家を出た。いちおう、彼女は母に声をかけた。母は愛娘に、愛しき愚息等を見かけたら夕飯は煮込みハンバーグである旨を伝えるように言った。父の所在を訊くと、どうせ釣りでしょ、と楽し気に返ってた。

娘はあたたかな家庭にて育ってきたようだった。

穏やかな坂道を下った先に砂浜がある。島民と知る人ぞ知る、美しい砂浜だ。遠浅で、白砂で、漂着物を除いてごみひとつなく、日差しはふしぎとやわらかで、そして静かな、外見だけでは感じきれないうつくしさが、ある。

お菊は辺りを見渡した。が、一見したところごみは無かった。それでも彼女は踵を返さない。ひとまず、ぐるりと歩くことにする。途中でサンダルを脱ぎ、裸足で歩いた。砂の感触がきもちよかった。彼女はその感触にも、同級生の誰もが飽きてしまっているその砂浜にも、彼女は飽きる様子がなかった。おそらくは一生そうなのだろう。

白の中に透明の緑を見つけた。

「あ」

お菊はそれが何かを知っている。ウランガラスである。拾い、ポケットに入れた。彼女はそれを収集している。用途はないが理由はあった。きれいだからである。個数は定かでないが近所の老婆からもらったピクルス漬け用ガラス瓶の半分を彼女の部屋で埋めている。

太陽が水平線に接しそうになる頃までにもうひとつ見つけた。それは赤かった。お菊はそれに透かせて夕陽を見た。赤い海と赤い空の中でも太陽は眩しかった。彼女は引き返した。

坂を上る　ごみ袋は三角にたたまれてポケットに入っている。

ごみはひとつもなかった。片付け甲斐のある流木なども見つからなかった。人工的なごみがなかったことは間違いなく喜ばしいことだったが、流木もなかったことには不満しかなかった。

西端の空以外が夜になっている空の、西方を見上げる。これまでに何度も見てきた光景だったが、彼女はやはり飽きずに嘆息し、ひどくひどく愛おしそうな目をした。

途中で長兄と父の声に振り向いた。ふたりはそれぞれでバケツと竿を持っていた。満面の笑みから察するに、大漁らしい。お菊も腕を大きく振りながら呼びかけた。